

で決定されていくのかをうかがい知ることができる。俗な読者としてはさらに知りたい部分だが、本書の性格からして記述にも限界があるろう。近い将来、岡田氏の『私録精神科医療史』が刊行されることを期待したい。

最後にページ数こそ少ないが第IV篇に続いている「付章精神科医療史研究の意義と課題」に言及したい。わたしは精神医療史（精神科医療史ではなく、岡田氏がかつて使用していた名称を使わせていただく）の領域で研究をしている者として、真つ先に「付章」から読み始めたからである。ここでは、呉秀三らによる私宅監置室調査の内務省本（タイトルは「精神病者私宅監置ノ實況」、一九一八年）の発掘が岡田氏の歴史研究の出発点であったことが書かれている。精神衛生法改正のころ日本精神神経学会の指導的立場にあった人が「『ぼくは呉さんのようなヘマはやらんよ』といいながら、そのあとはこの論文をかつきまわっている」ほど、今日では有名になった論文である。「これを無視してきた日本の精神医学とはなんだったのか」と問う岡田氏の言葉は、これまで歴史研究がいかに軽視されてきたかを示すものだろう。わたしに言わせれば、この呉・榎田論文は未だに無視されている。タイトルを知っている者のなかで、一行でも原文を読んだ者はどれだけのいるだろう。繰り返しになるが、歴史はただ過ぎ去った事柄ではなく現在や未来のためにあるのだという認識が貧困な風潮にあつて、本書が刊行された意義は大きい。

（橋本 明）

〔医学書院 東京都文京区本郷五―二十四―三、電話〇三―三八一七―五六〇〇、平成十四年九月一日、B五判、二七四頁、定価六八〇〇円〕

新村 拓 著

### 『痴呆老人の歴史』

著者は古代から現代にわたり、日本人の死生観の変遷を古典文学、古医書類を通じてたどり、一連の「日本医療史研究」を著作公刊している。本書はその中で「痴呆老人」に焦点をあててまとめたものである。本書の構成は八章からなり、第一章は前言、第二―五章は明治前の老人とその生誕の中から痴呆を抽出し、その介護の様相を読者に伝えている。第六、七章は西洋医学が導入されて痴呆の実情が鮮明になり、介護の変遷を加味して論述しており、第八章では戦後における痴呆老人に対する社会福祉の対応が論ぜられ、付論として老人の終焉に深く関わる「死の臨床と安楽死」が取り上げられている。各章毎に文献が詳細に記述されているので、後学者にとって極めて有用である。

中近世にあつては「源氏物語」などの古典から痴呆を「ぼけ人」、「老耄」として老いの運命が表出されており、中国渡来医書を通覧して「恍惚、狂言妄語、健忘」を痴呆の具現として論じ、これは中風の随伴症状として理解されている。評

者の管見では「脳」に対する認識がない時代であるから、痴呆の中核症状である「記憶、認知、人格」障害の判別ができず、現代の我々が理解する精神病との鑑別は不能といわざるをえないが、著者はその至難な作業に敢えて挑戦し、後学者に貴重な指針の数々を提供している。高く評価したい。蘭医学が導入され、宇田川玄真の「西説内科撰要」、緒方洪庵「扶氏経験遺訓」などを検索し、痴呆と脳の関わりを認識する萌芽と位置づけており、洪庵の「老衰」と「健忘」の記述に着目している。識者らが、著者とともに蘭学時代に焦点を絞り、今一度老人痴呆に課題をもってはいかがであろう。共同研究が可能であれば、その成果があがるのではなからうか。

近代明治期となりドイツ医学が導入されて、痴呆は精神医学の分野で認識された。著者は日本における初出の精神病学「精神病約説」(神戸文哉)はじめ江口襄「精神病学」、呉秀三「精神病学集要」など、また、わが国最初の専門書である入澤達吉「老人病学」まで明治期発刊の斯界の書を検索して痴呆の記述を点検し、当時の痴呆に関する概念の把握に著者は努めており、その労は多ししなければならない。これが容易に可能になったのは、著者が以前医育機関の老舗である京都府立医科大学に勤務していたからである。

ところで、評者はかねて日本における老人医学の源流を検索してきた中で、一つの解明したい点があった。それは「痴呆」の医学用語を誰が最初に使用したか、また、「痴」か「癡」かについてである。評者のメモによれば、神戸は「痴呆」、呉

「癡呆」、石田昇「痴呆」、入澤は「癡呆」、内科用語集・日本内科学会(昭和十六年)では「痴呆」、医学用語集第一次選定では「痴呆」、戦後の植松七九郎の「精神医学」(昭和二三)では「老年癡呆」と漢字表記に相違がある。このようなことの記述の理由は、本書には多く「癡」が登場するからである。本書の大きな特徴の一つは現代日本の異常な高齢化社会における老人本人は勿論、痴呆状態に入った老人を取り巻く社会環境のありかたを著者は歴史的記述をとおして論述しており、類書ではまったく見られない。従って、この分野の指針となることは確実であろう。なにはともあれ、一読されることを推奨します。

(寺畑 喜朔)

〔法政大学出版局、東京都千代田区九段北三一―一七、電話〇三―五二―四一五五〇、二〇〇二年七月二十五日、B六判、二百七十頁、二二〇〇円〕

会田 秀介 著

『医と石仏・庶民の治病信仰』

著書の帯に「病平癒の切実な願いと祈りが石仏にはこめられている」と述べ通読すると著者は石仏と出会い、写真を撮る様になり、やがて石仏を通して民間医療の一端を探り著書と成ったのであろう。医史学というよりも民俗学に視点を置